

第 229 回研究報告会 (7 月 5 日)

環境問題と人権 ―多世代にわたる公害病患者の差別と偏見―
佐藤孝則

1. 「水俣病」患者への差別と偏見

日本政府が水俣病の原因はメチル水銀で、その化合物を蓄積した魚貝類を多食したことがこの病気の原因だと正式に認めたのは、昭和 43 年 9 月 26 日のことである。患者の公式確認から 12 年経った後のことである。

水俣病の患者家族は、“奇病”、“伝染病”という偏見・差別に耐え、それを余儀なくされていた。当初、この病気は一部の漁業関係者の間で起きていたことだと思われていたが、次第に漁業関係の家族患者が増加するにつれ、今度は漁業関係者全体あるいは漁村全域に対する偏見・差別へと変わった。特に一般市民、さらに巨大企業のチッソの従業員などからは冷たい視線が浴びせられ、行政もそれを看過・助長する傾向にあった。これは、明らかに職業差別であり、漁民に対する露骨な偏見であった。それは企業城下町として繁栄した水俣市の大きな落とし穴であり、それはまた地域崩壊の序章でもあった。

昭和 44 年 6 月 14 日、水俣病患者互助会の訴訟派の人たちはチッソに対する損害賠償を熊本地裁に提訴し、昭和 48 年 3 月 20 日、地裁は患者側勝訴の判決を示した。このように比較的早く判決をみたのは、一つには、昭和 45 年 4 月から「公害に係る健康被害の救済に関する特別措置法」(健康被害救済特別措置法)が施行され、水俣病患者に対しても医療費支給などの救済措置が講じられるようになったこと。二つ目は、政府が水俣病の因果関係を正式に認めた直後の裁判であり、水俣病特有の「ハンターラッセル症候群」の症状がはっきり認められる患者が中心だったからである。

平成 2 年、熊本県と水俣市は「環境創造みなまた推進事業」を始めた。そして平成 7 年には未認定患者補償問題に一応の決着がついたことによって、切れた地域の絆を結び直そうという「もやい直し」が、患者、地域住民、地元行政との間で高まりを見せた。

2. 「カネミ油症」患者への差別と偏見

カネミ油症事件とは、昭和 43 年、福岡県北九州市小倉北区にあるカネミ倉庫で作られた食用油(米ぬか油)に熱媒体として使用されていた PCB が混入し、それを摂取した人々に顔面などへの色素沈着など肌の異常、頭痛、肝機能障害などが起きた食品公害である。妊娠中にこの油を摂取した患者からは、皮膚に色素が沈着した状態の「黒い赤ちゃん」が生まれた。母乳を通じて皮膚が黒くなったケースもある。眼球が飛び出たり、親指の外側にもう一本の指が出ていた赤ちゃんも生まれた。

患者である一人の主婦はテレビ報道の中で、「当時の私は気が狂いそうでした」「子どもの離婚はあちこちにありました」「娘は、もしかしたら油症の影響が出ているかも……と不安がっています」と述べ、別の主婦は「生まれた子どもには肛門はなく、すぐに人工肛門の手術をしました。身内も知らないことです」と述べた。41 歳の男性は、「私は「黒い赤ちゃん」として生まれた。現在 3 人の子どものうちの 2 人が、同じ病気の症状が出ている」と言う。さらに別の患者は「カネミの人とは結婚するな。カネミの人は嫁にもらうな」と言われ、「差別、偏見を考えて、子どもには一切話をしていなかった」と述べた。

最近、被害者の孫の「へその緒」からも高濃度のダイオキシンが検出されているように、今なお残る健康被害、被害者への差別・偏見が、子や孫の三世にまで引き継がれている現状が明らかになってきた。

大阪希望館 1 周年記念集会で講演

金子 昭

7 月 31 日、大淀コミュニティセンター(大阪市)で大阪希望館 1 周年総会が開かれた。大阪希望館とは、住まいと仕事をなくした人のための再出発支援センターとして昨年 6 月に開設された民間団体である。1 周年記念集会は、第 1 部が同団体の運営協議会総会、第 2 部が記念集会だった。記念集会では、自らもホームレス生活の経験もある「さすらいのピアノマン」と合田清氏のピアノと、ホームレスの就労支援をしている竹内俊浩氏のギターの演奏会がオープニングに行われた。その後で、私が「社会を変革する希望の力」と題して 1 時間、記念講演を行った。

講演の概要は次の通り。お上に頼らず、自分たちの力で「世直し」を目指すという、民衆宗教が持つ力は、社会の谷底からせり上がっていく「希望の力」になりうる。民衆宗教は、社会の構造を内側から変革する。民衆宗教の教祖たちが取ったのは、この内側からの「世直し」の行動であった。「世直し」、つまり社会変革と、自分の「心直し」、つまり自己変革とは相互に関

係する。どんなに働いても正社員にもなれず、生活が楽にならず、かといって技量を身につける労働でもないという、若者の労働状態は、当然ながら、これを改革して、「せり上げて」いかなければいけない「谷底」の状態にほかならない。そして「せり上げる」には、自分自身の力も必要であり、まず自らが“希望の力”を養っていく必要がある。この世の中は「複雑系」だから、たった一人からの変革も可能である。権力の存在や社会の同調圧力に対し、無自覚、無抵抗ではあってはならない。自分だけ楽しんで(勝ち組になって)、他の人々が苦しんで(負け組になって)しまうような社会のあり方は変革していかなければならない。一人勝ちをめざす競争原理で行うのではなく、お互いに助けあってそれぞれが自分の人生の勝ち組になれるような社会を求めていくべきである。

私は、今回、民衆宗教の話を手掛かりにして、草の根からの社会変革について論じたのであるが、それはこのような形で語ることでは一般になじみがない宗教の持つ力と可能性もうまく伝えられるのではないかという思いもあったからである。会場には、労働組合、宗教団体、社会福祉団体、ホームレス支援団体の関係者や一般の市民が大勢集まって、熱心に聴講してくれた。

リュブリャナ出張報告

堀内みどり

2010年7月27日から8月2日にかけて、リュブリャナ（スロベニア）とパリを訪問した。本年3月にリュブリャナ大学のProf. Maja Milcinski 先生（東洋哲学）、Miran Bozovic 先生（哲学）およびAna さんを迎えて「生と死」についての共同ワークショップを行った。その際、さらに研究を進めることを前提に共同研究ができないかという提案があり、来年以降に共同研究を立ち上げることを目標に、これまでリュブリャナ大学の研究者が培った研究成果と今後の方針について、話し合うことを目的とした。3月のワークショップでは、スロベニアでも自殺する人が多いという報告があつて、実際にリュブリャナを訪問したいという思いもあり、以下の日程で出張した。

- 7月27日：午前中の飛行機にて、パリ経由でリュブリャナ着（午後10時半）
- 7月28日：Prof. Miran Bozovic 先生（哲学）と共同研究について会談。カソリック教会訪問（2箇所）
- 7月29日：Prof. Maja Milcinski 先生（東洋哲学）と共同研究について会談。正教会訪問
- 7月30日：Prof. Maja Milcinski 先生と打ち合わせ、会談内容の確認。午後の便でパリへ、午後7時半着。
- 7月31日：Prof. Rada Ivekovic 先生（社会学）訪問
- 8月2日：午後の便で帰国（パリの空港でコンピュータトラブルがあり、延着）。3日午前10時半過ぎに関西空港着。

日本からスロベニアへは、パリかフランクフルト経由となり、今回は天理教ヨーロッパ出張所に甥が勤務していることもあつて、パリ経由でリュブリャナに向かった。

スロベニアは人口200万人ほどで、リュブリャナはその首都。市内の中心部は、いずれも徒歩圏内といつていいほどコンパクトにまとまった美しい古都の風情がある。古い城は観光名所となつていて、この城を中心にして町が広がり、あちこちにキリスト教の教会が位置する。国民の70%がキリスト教の信者で、最近初めてのモスクが建築中とのこと。もともとユーゴスラビア社会主義連邦共和国を構成していた6つの共和国はそれぞれ独立し、スロベニア（1991年独立）、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、セルビア、モンテネグロ、マケドニアとなつ



リュブリャナ大学文学部正面。ここにミルチンスキー先生たちの部屋があるが、天理大学研究棟の個人研究室の3分の2ほどの大きさを4人で使用。

ているが、モスクは旧ユーゴ時代ですでにイスラム教徒だった人々によって計画された。コソボ（セルビアの自治州）は2008年に独立を宣言した。イタリア、クロアチア、ハン

ガリー、オーストリアと接し、南西でアドリア海に面している。

スロベニア人の気質は勤勉で秩序的と言われ、文化的にはドイツ語圏の影響を



市内のあちこちにあるカソリック教会の一つ。

強く受けている。言葉はスラブ系。2004年にEUに加盟した旧社会主義諸国の中では最も高い経済水準で、2008年には旧社会主義諸国で初めて欧州連合の議長国となった。政治的にも、民主的な政体を安定して維持している。しかしながら、昨今の世界的な経済不況の影響は研究者にも及び、6月には大学の教員や研究者が約40名解雇されたという。こうした経済的問題が近年の自殺に結びつく重大な要因のひとつと考えられている。

今回の話し合いでは、先行するミルチンスキー先生を中心とした「生と死」の研究を前提に議論した。そこでは、両国が持っている文化的背景を考慮しつつ、宗教の中心的課題であるはずの「死」が現実の生活場面において可視化されていないことを討論した。今後はそれを「生」の場面へと反映させる方向で、共同研究の具体的なヴィジョンを考えていくことになった。これは、スロベニアも日本と同様に高齢社会であることを念頭に入れているものである。カソリック系の教会の朝のミサに同席させてもらったが、大きな教会堂には、旅行者を含めて約20名しか集まっていなかった。地元の方18名のうち16名は女性で、皆高齢者だった。



中心部の丘に立つ古城



やや高台から眺めたリュブリャナ市街

公開講座「死生観と超越—仏教と諸科学の学際的研究」に参加
堀内みどり

7月22日、龍谷大学顕真館（礼拝堂）で開催された標記講座に参加。通常授業の1時間目に開催され、学生も多数参加した。テーマは「日本の終末期医療におけるスピリチュアルケアと宗教的ケア：ビハール僧とチャプレンの宗教間対話より」。講師として、仏教から融通念仏宗の森田敬史氏（長岡西病院ビハール病棟ビハール僧）、キリスト教から浜本京子氏（日本バプテスト病院チャプレン）が招かれ、打本未来氏がコーディネーターを務めた。

朝の勤行が行われたあと、スピリチュアルケアと宗教的ケアについて打本氏が簡単に説明され、実際の終末期ケアについて二人の講師から話があった。浜本氏は、患者さんの気持ちは日々変化するもので、その中で「魂への配慮」の重要性を話された。森田氏は、これら二つのケアを明確に分けてしまうことは難しいが、宗教的な方略を能動的に遂行するケアが宗教的ケアではないかと思うと述べられた。

「共生社会への道筋—社会福祉からの提言」

第47回社会福祉セミナーに参加

八木三郎

財団法人鉄道弘済会主催の本セミナーは、一人ひとりが尊厳ある存在として尊重され、共に支え合いながら生きる共生社会への道筋を明らかにするとともに、共生社会実現に貢献する社会福祉のあり方を考える機会の一つとして、7月29日から30にかけて開催された。

近年の我が国は経済情勢の悪化等により、人々の生活を一段と窮乏化させ、再び貧困が社会問題化する状況が存在する。くわえて、複雑多様化する生活課題、格差社会における種々の偏見、差別が社会的排除にまで拡大する問題が暮らしのなかで顕在化している。

こうした現状にあって、一人ひとりが、課題解決の過程に自ら参加、参画し、互いに支え合い、地域社会において安心、安全を実感できる暮らしの仕組みづくりが急務といえる。その社会づくりに主体的に貢献するにはどうあればいいのか等について自治体、社会福祉協議会、市民等の立場からそれぞれ問題提起が行われ、それに基づき熱心な議論が交わされた。

2日間のプログラムは、基調講演、各種テーマ別のパネルディスカッション、全体会でのシンポジウム等であった。

とりわけ、基調講演では、ご自身が障害当事者である星加良司氏（東京大学バリアフリー教育開発センター講師）の「共生社会とは何か」と題して、障害学からみた社会のあり様について考えを述べられた。社会における異質性や多様性の承認を原則とする共生社会構築に向けてどうあればいいのか、また実現に向けての具体的な規範的課題や具現化する上での社会科学的な手だてと、実践的アクション等といった各課題をもとに提言がなされた。

(from page 12)

ticipated in the Athens Paralympics as a college student at Tenri University, and for the Beijing Paralympics, she placed fourth while working for the Tenri University.

Shigeru Noguchi — Religion, International Cooperation, NGO (21) The History of Donate-a-Meal Peace Movement [1]

Given that we face an assortment of global crisis such as poverty, natural disasters, and wars that cannot be solved within the framework of a nation, what role does religions, which have deeply involved itself with the lives of people, have today? With this question in mind, this series has focused upon religious NGO that had its roots in religious groups and continue to base their activities upon values and ethics drawn from religions. From Christianity, I have looked at the Japan Overseas Christian Medical Cooperative Service, and from Buddhism, I examined the Shanti Volunteer Association. From this issue, as an example from the new religions, I will introduce a peace movement associated with the Rissho Koseikai. Among the widespread peace activities of the Rissho Koseikai, I want to focus upon the “Donate-a-Meal Movement,” which has long sustained its international support activities and continues to be active today after thirty years in existence.

『グローバル天理』 合本のご案内

これまで出版された『グローバル天理』の合本を販売しています。これは2000年から2009年までの各1年分（12号分）を1冊にまとめ、簡易製本したものです（頒価は200円）。

毎月25日の公開教学講座の会場と、研究所事務所のみに取り扱っていますので、お求め下さい。郵送による販売はお断りしております。お問い合わせは郵便かFAX、もしくはメールにてお願いします。

問い合わせ先：

〒632-8510 奈良県天理市柚之内町 1050

天理大学 おやさと研究所 『グローバル天理』編集部

Fax: 0743-63-7255

E-Mail: oyaken@sta.tenri-u.ac.jp



現代社会と天理教(1)

地雷 虐待 格差社会
DV 孤独死 戦争
難民 AIDS 老々介護 貧困 自殺
核兵器 フルエン 温暖化
CO2 新型インフル 南北問題 環境破壊
砂漠化

天理大学 おやさと研究所 平成22年度公開教学講座

世界が大きく激動している今日、私たちの価値観や身の回りの生活もしたいに変化し、いつのまにか多様な価値観が生まれてきました。しかしその価値観は、ややもすると利己的な価値観となって、「我さえ良くば、今さえ良くば」の風潮を拡大・助長する危険性をもたらしています。そのような現代社会の中で、私たちが日々考え行動する拠り所は、常に天理教の教えに基づくことは言うまでもありません。この講座では、「現代社会と天理教」というテーマのもと、2年間にわたって天理教の教えに基づき生き方、行動のあり方を、現代社会における具体的事例の中から考えていきたいと思います。

第1講 4月25日(日)
井上昭夫 「谷底せりあげ」とユートピア
アフガン・アフリカでの「谷底」せり上げの実体験を映像を通して語ります。ユートピアの「高山」を極めた共産・資本主義もいまや地獄相に陥っています。そこで現代宗教のユートピアの有無とその行く末を予測してみたいと思います。

第2講 5月25日(火)
澤井義則 道に道あり
「ちばも鏡なら、世も鏡」。今、私たちは、どのような姿を「世上の鏡」に映し出していく必要があるかについて考えてみます。

第3講 6月25日(金)
堀内みどり 白紙に戻って一より始める
男女共同参画という理念の実現を目指している現代社会で、天理教婦人会設立百年を迎えることの意味を考えてみます。

第4講 8月25日(水)
岡田正彦 情報化社会と「たすけ合い」
ポスト・モダン、後期資本主義、情報化社会などと呼ばれる新たな社会状況のもとで、これから求められる「宗教」のあり方を模索しながら、天理教の教えに基づく人間の生き方の意義について考えていきたいと思います。

第5講 9月25日(土)
幡鎌一弘 教えの足もとを照らす
温故知新。先人たちは、常に「現代社会」と向き合ってきました。向き合いつつ、教えを磨いていたのです。歴史を振り返ることで、私たちの今を考えます。

第6講 10月25日(月)
澤井義次 生かされて生きる一生の意味論—
中高年層の自殺の増加など、現代社会が抱える諸問題も射程に入れながら、筆者がこれまで探究してきた「生の意味論」を理論的に展開し、現代社会における天理教の教えに基づく人間学の視座を提示したいと考えています。

第7講 11月25日(木)
宮田 元 陽気ぐらしの世界をめざして
いろいろな問題が起こっている中で、現代社会は大きな変化を見せつつあります。このような現代において、「元の理」をてがかりとし、常に変わらぬ教えを広く深く掘り下げつつ、あらためて私たちの生き方を探ります。

場所：天理教道友社 6階ホール
時間：13:00～14:45
* お車での来場はご遠慮下さい。

グローバル天理
第11巻 第9号 (通巻129号)

2010(平成22)年9月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 深谷忠一
編集発行 天理大学 おやさと研究所
〒632-8510 奈良県天理市杣之内町 1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <http://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm>

E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷 天理時報社

Printed in Japan